お二人の思い出

伊東　通（十五期生）

平成二十八年八月二十二日、ちょうど台風がダブルで来襲して、その一つが関東地方に上陸した朝に、河地安彦先生は亡くなられた、とご長男のお嫁さんが教えてくださった。八十七歳であられた。

先生から電話が入っていたことに後から気が付いて連絡をしたところ、お嫁さんが出られて先のことをお伝えいただいた。

「台風が上陸して物凄く荒れている朝に、父は亡くなったのです。そうして台風と一緒に福島の方へ去って行ってしまいました」

福島は先生の故郷であり、別荘もあって、夏の間いつも過ごされていたところである。

まるで先生が車を運転される時の様に、激しく怖いようなすごいスピードで行ってしまわれたということになるだろうか。

もう一つの台風の方は沖縄方面へ逸れたはずが又ぐずぐずと戻ってきて、大きな被害を出したのは記憶に新しい。

一方、河地先生は豪快にダイナミックに、男らしくさっさと彼方へ旅立たれた訳だ。

一見穏やかで優しそうに見えるが、強い意志と倫理観に支えられた厳しさを秘めた先生らしい去り方だと思わざるを得ない。

実際、最後まで生きようとされる意志が強かったとご長男もおっしゃっておられた。

先生の言葉で思い出すのは、附属中での研究会に講師としてお出でいただいた折に、

「カントのように、自らの行動がそのまま倫理の規範となるように行動することが大切だ」

とおっしゃられたことである。その時強く印象付けられたのでよく覚えている。

もっとも、河地先生は、哲学者タイプというより、モラリストではなかったかと思う。フランスのモンテーニュのように、よく現実を見、検討して、妥当性を見出し、粘り強く解決して行く、懐の深いタイプだと感じる。

ある時、先生と話していると

「伊東君は、ヘッセが好きだろう」

と不意にお尋ねになった。そうですとお答えすると、実はご自分もそうなのだとおっしゃられるのだった。

いつだったか入院された折に、カザルス演奏のバッハの無伴奏チェロソナタをお届けしたところ、あまりお好きでないご様子であったので、その次に入院された時には、シフ演奏のモーツアルトのピアノソナタ集にしたところ、これはお気に召したようであった。

いろいろ思い巡らせてみると、先生はカントやモーツアルトやヘッセの明澄性とでも言ったものを好まれたようではあるが、生き方は知恵に裏打ちされた融通無碍なモンテーニュによく似ていると思わざるを得ない。その広い目配りと実行力から言ってもそうだと思う。しかしそうは言っても

「僕は俗っぽいんだ」

とよくおっしゃっておられた先生はご同意されないかもしれないが。

治田成夫先生は、河地先生が亡くなるほぼ一年前の九月始めに亡くなられた。河地先生と同い年なので、八十六歳だったはずだ。

治田先生は亡くなられる前に、奥様に、決して誰にも知らせてはならないと厳しく命じられたそうである。そのために私たち、卒業生も旧附属中の教職員も、暮に喪中はがきがご子息から届くまで、まったく気が付かなかった。

この点は、河地先生も同じで、誰にも知らせないように、ご家族に強くおっしゃったそうである。先生が亡くなられる一年以上前に僕自身も、決して大騒ぎしないよう、知らん顔しているようにと直接電話で告げられたのだった。

恩師お二人の、ご自分の死後についての潔癖さ、毅然とした態度に打たれざるを得ない。

実は、喪中はがきが届く数日前に治田先生の奥様から僕にお電話があった。

「主人から叱られるかもしれないけれど、伊東先生だからお知らせします」

という前置きで、先生の亡くなったことをお伝え頂いた。生前、先生は僕からの手紙が届くと実に楽しそうにお読みになっておられたと奥様はおっしゃった。そういうこともあって、お知らせいただいたようであった。

僕の手紙の内容は近況報告や、先生の最後の二冊のご著書「意識と主体性」、「人間の存在意義」に関する質問などであった。

先生のこの二冊のご著書から、存在は存在自体を超えるという、ヘーゲルの言う弁証法が実に生き生きとしたダイナミックなものであることを、またそれに基づく「創発」というクリエイティブな考えを少しでも理解することができたのは、大きな喜びである。

加えて、死後に我々の存在が無にはならないという論理的証明と、無は存在し得ないという結論は大きな励ましとなった。

先生はカントもヘーゲルも、無論ドイツ語でお読みになっておられたわけだが、

「ヘーゲルは分かるがカントは手強くってね」

とおっしゃるのをうかがったことがある。

また、ラテン語も熱心に学んでおられた。こちらは只々恐れ入るばかりであった。

僕が中学生だった頃、治田先生が何やら外国語の歌を口ずさみながら掲示物を貼っておられるのを目にしたことがある。だいぶ後になって分かったのだが、先生がドイツ語で歌っておられたのはシューベルトの歌曲であった。シューベルトを始めとするドイツ歌曲がお好きなのであった。

先生は長い間、金沢区にお住まいだったが、区内の合唱団に所属されていて、何度も発表会でステージにお立ちになっておられた。歌い終わった後の先生は実にいい笑顔であった。

また、先生の将棋好きは有名で、どれくらいの実力なのか僕などにはわからないが、若松先生ならご存知かもしれない。

よく、幸田露伴が娘の文を唐紙を隔てて座らせては将棋の相手をさせるという無理な注文をしたのは、かわいそうだとおっしゃるのだったが、それはどういう意味であったのだろうか。

僕が附属中に勤めてからの最初の三年間は、治田先生が副校長だった。先生の月に一度の朝礼での訓話は難しいので生徒たちは弱っていたが（教職員もそうだったかもしれない）、後に附属中を退職される時に先生はそれらを含めて「附属中学で語ったこと」という冊子にまとめられて教職員に配られた。落ち着いて読むと確かにいい話なのである。でも難しい。研究紀要に発表された論文を頂いたこともあるが、とてもではないが歯が立たなかった。

先生の最後のご著書の二冊も僕にとって難しいことには変わりはないのであって、しょうがないのでストップウオッチ片手に十分ずつ毎日読むことにした。十分ならどんなに難しくても耐えられるだろうと考えた訳で、こうやって何回も読み直した。

「小林秀雄が、ベルグソンの表現は団子を串刺しにした様に、論理を連ねて行くのだと言っていたが、僕もそうしたいのだがどうも難しくてね」

とは先生のお言葉である。先生が丁寧に順を追いつつ述べられていることを、何度も行ったり来たりしながら読むのはまるで山登りをしているようであった。先生の論理の積み重ねをたどるのは大変であった。

今から七年前（平成二十二年）五月に、お二人とご一緒に沼津の国家公務員の施設に泊まったのは、今となっては良い思い出である。それ以前から、お二人とも、三人で一晩ゆっくり過ごそうという希望を漏らしておられた。

恩師お二人とご一緒ということで、僕は弱っていたのだが、とうとう、沼津なら治田先生が当時お住まいの名古屋からも、横浜からの距離と大して違わないだろう（実は大違いで名古屋からの方がはるかに遠かったのだが）ということで、河地先生が計画を立てられたのである。

この時は、夕食前から、僕がリュックで担いでいったワイン（無論複数本でそのうちの一本は冷やしながら運んだ）を飲みながら、三人で色々なことを夜遅くまで語り合ったのだった。夕食が済んだ時に、係の男性から

「いいお話でしたねえ」

といわれたのは、よっぽど三人で楽しそうに話していたのだろうと思う。

思えば、恩師お二人と教え子という妙なというより、緊張すべき取り合わせのはずであったが、そのようなことは少しもなく、翌日も若山牧水の記念館を訪ねたり、沼津漁港で寿司を食べたり（治田先生はマグロが大好物だとおっしゃられて、いくつも召し上がられた）、干物を買ったり、午後まで三人で愉快に過ごした。

今から思えばなんと貴重な機会であったことか。

このフェアなお二人の先生の生き方、晩年の立派な姿を範として、自身の老年期を意味あるものにしたいと強く思っている。

河地先生、治田先生、有難うございました。